

---

# KAMEN RIDER SUN BEETLE

嫌な音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

K A M E N R I D E R S U N B E E T L E

### 【Zコード】

Z5019Z

### 【作者名】

嫌な音

### 【あらすじ】

遡る事、七年前。

地球上に飛来し、アメリカのスプリングフィールドに落下した巨大隕石により、その周辺地域は壊滅した。

そして、巨大隕石による副産物として現れたのが、人間を殺害しその人間に擬態する、なぜか地球上の昆虫や節足動物に酷似している、後に、「インパスター」と呼ばれるようになつた怪物だった。インパスターに対抗するための唯一の方法は、「ゼクトカンパニー」が開発した、「K A M E N R I D E R S Y S T E M」のみ。

インパスター討伐の功績をきっかけに、ゼクトカンパニーは、国全体に影響力を持つような大企業にのし上がっていき、壊滅したスプリングフィールドに、新しい街を興し、「エアラダー・シティ」と名付けたその街に本社を置き、わずか数年で飛躍的に発展させた企業城下町となつたそこで、システム適合者の、「仮面ライダー」とインパスターとの戦いを、「ZECTV」として中継し、更に大きくなるゼクトカンパニー。

様々な苦悩を抱える仮面ライダー達、暗躍するインパスター、謎の多いゼクトカンパニー。

それぞれの思惑が交差しあい、この世界の物語は繋がっていく…。

これは、「仮面ライダーカブト」を、「仮面ライダードラゴンナイト」のよひに、海外リメイク風にした作品です。

## はじめに

数年前に、「仮面ライダードラゴンナイト」と書つ作品がありました。日本の代表的ヒーロー、仮面ライダーの平成第三作品目、「仮面ライダー龍騎」の米国リメイク版です。

本作品は、平成仮面ライダー第七作品目、「仮面ライダークバト」をそのノリで、海外ドラマ風にリメイクしようよつてものにして。しかも、私自身が平成仮面ライダー、そんなに詳しくないと書つ。

なぜ、そんな血迷つた事を実行にうつしたのかは、理由を知つてやつてもいいと言つ寛大な方は、活動報告にて詳しく載せてますので、そちらを。

この場では、リメイクした事による「仮面ライダークバト」の原作設定との相違点、と言つか、注意点をいくつか。

仮面ライダーの名前の変更があります。

例えば：仮面ライダークバト 仮面ライダーサンビートル  
と言つた感じで、他のガタック、ザビーなどのライダー達も名前が変わっています。

ゼクターをインセクトニアへと改名。

それぞれのライダーに、専用マシンがあります。（それを、私が上手に扱えるかどうかは、別問題ですが）

「CLOCK UP」、「CLOCK OVER」が「SPEED UP」、「SPEED DOWN」に変更。理由は、「CLO

CK～」が造語なのでは、といつ私の考えです。

変身のプロセスも、Hフレクトも本作独自のものとなつてあります。

一部、それぞれのツールの名称も、変更しております。

ワームをインペスター（impostor - imposter：  
詐称者）へと、改名。

「こんなのでよひしければ、これからよひじくお願ひします。逆に、  
「うじうのが苦手な方は、名残が死ぬませんが、「戻る」を推奨し  
ます。

## Episode 1・戦いはへそでするものだ／A Part

夜になり、月から降り注ぐ月光よりも、この街、「エアラダーシティ」から射す街明かりの方が、辺りを真つ昼間のように輝かせる。そんな、エアラダーシティを走る一台の大型トレーラー。横文字で、「ゼクトカンパニー」と刻まれた、そのトレーラーの中に、今、俺はある。

行き交う全ての車が、俺達が乗っているトレーラーに路を譲る。最初の内は、結構良い気分だったが、最近じゃ、それが当たり前になってきた。

俺の他に、トレーラーに乗っているのは、蟻みたいなフェイスヘルムをかぶり、様々な通常兵器には耐えうる、鋼鉄の五倍の強度を持つ、バトルドレスユニフォーム、通称、「BDU」と呼ばれる黒一色で統一した、屈強な男達が十数人。

俗に、「ゼクトルーパー」と呼ばれる、ゼクトカンパニーの私設部隊が、今の俺が就いてる仕事だ。

七年前。エアラダーシティの旧名、スプリングフィールドに落下した巨大隕石のせいだ、街はもちろん、その周辺地域は完全に壊滅した。

厄介なのはそれだけじゃない。巨大隕石落下が関係あるのかどうかは正直分からないが、それと同時に人間を殺害し、その人間に擬態する、「インパスター」と呼ばれる怪物達が現れた。

インパスターは、次々と人類を襲い、人間の姿を借りて密かに現代社会で息づいている。

そんな憎き怪物どもを一掃するために、俺はインパスターと最前线で戦う、ゼクトルーパーになつたんだ。

俺達の活躍で、インパスター共も大人しくなつてきて……。と言うのは、真つ赤な嘘。いや、インパスターの強さには、ほとほと手を焼いているのが現状だ。

なにせ、仲間のゼクトルーパーは、インパスターが出現する度にやられている。俺だつて、もし出動させられたら、いつやられるか分かつたもんじやない。

だから、インパスターに対抗するために、ゼクトカンパーーが作り出した、「KAMEN RIDER SYSTEM」が、絶対不可欠な存在となる。

俺は、トレーラーの外側に取り付けられたサーモグラフィで、赤外線を分析し、熱分布を図として表した、トレーラー内部に設置された画面を確認する。

人間に擬態したインパスターの体温は、普通の人間より低いため、サーモグラフィを通して、街行く人々を観察する事で、擬態を見破る事ができる……、つと、見つけた。一見すると白色の肌の普通の男性三人組。

しかし、その内に隠された正体は、醜い怪物だ。

「インパスターを発見！ 総員、直ちに戦闘準備、並びに各仮面ライダーに緊急連絡！！」

モニターの監視係の俺がそう叫ぶと、ゼクトルーパー達は各人担当の仕事の準備を始める。

マシンガンブレードに弾丸を装填する者。ゼクトカンパーー本社と、俺達とは別に街を巡回している他チーム、さつき俺が叫んだ通りに、仮面ライダー達に連絡を取る者。

俺？ 俺は、さつきも言つた通り、モニターの監視係。内勤のゼクトルーパーさ。しかし、正義を愛する心は誰にも負けないつもりだ。

「フリーズ！ 動くなッ！ 一步でも動いたら、容赦なく撃つぞ！」

！」

「いつ、一体、なんなんだよお！？」

「だ、誰か！ コイツ等を説得してくれ！！」

「殺されるう！ 助けてくれえ！！」

俺と通信係の数名を除いた、俺の所属するチーム全てのゼクトル一派達が、三人組にマシンガンブレードの銃口を向けながら、じりじりと追い詰め、三人組の背後にはビルの壁。そこを半円で取り囲む。

唯一、逃げられそうな下水道に繋がっているマンホールの蓋も、ゼクトル一派の後ろにある。三人組の逃げ場はない。

その周りには、十分な距離を置いているものの、数え切れない人數の野次馬。彼等の誰一人として、三人組の訴えを真に受けてない。逆に、野次を飛ばしながらも、冷めた視線を送っている。

今まで、ゼクトカンパニーが、一般人と擬態したインパスターを間違えた前例が一度もないから無理もない事だが、正体がインパスターと分かつているとは言え、この光景はなんとも言えない気分にさせる。

その気分のせいで、俺は、現場に忍び寄っている、複数のサーモグラフィに映る影に気付くのに時間がかかった。

「……、ツ！ 複数のインパスターが、そっちに向かっているぞ！」

俺が無線越しに、ゼクトル一派に怒鳴ると同時に、マンホールの蓋が吹き飛び、中から複数の緑色をした分厚そうな外殻を持つ

た蛹みたいなインパスターの中でも個体数が最も多い、ピューパ達が躍り出た。

それに併せ、三人組が邪悪な笑みを浮かべると、三人組もインパスターの正体を露わにした。

「なつ、何い！？ ぐあああああッ！！」

「クソツ！ うわああ！？」

「ひいい！ に、逃げろお！！」

「きやああああああ！？」

途端に辺りに阿鼻叫喚が、巻き起こる。インパスター達に逆に挟み撃ちされた、ゼクトルーパー達。その状況を見て、瞬時に身の危険を感じた野次馬達。

「メーデー！ メーデー！ インパスターに挟み撃ちにされたッ！  
早く来てくれ！！」

通信係のゼクトルーパーの叫びが、トレーラー内に響き渡る。おそらくは、いや、きっと、彼が求めているのは、別のゼクトルーパー部隊なんかじゃない筈だ。

俺達が、今、助けを求めているのは……。

一匹のピューパの腕が、幼い子供の脳天目掛けて振り下ろされる。既に、現場のゼクトルーパー部隊が壊滅、善くて動けなくなるくらいの大怪我、悪くて死。

この場のゼクトルーパー部隊さえ排除すれば、次に狙われるのは、集まっていた野次馬達。

子供は少年だった。元々は母親と、この騒動の現場に偶然出くわ

した、ただ野次を飛ばしに集まっていた連中とは違っていた。

この騒ぎの中で、母親とはぐれてしまい、目の前には、自分よりも一回り大きいピューパ。

少年は、目を瞑り、この騒音の中、有らん限りの大声で叫んだ。

「……っ、仮面ライダーっ！…」

- - 奇跡は起きた。ピューパの振り上げられていた太い腕を、蜂のような、しかし、蜂にしては大きい、メタリックな印象を与える何かが、弾き飛ばした。

それから直ぐに、響き渡るバイクのエンジン音。

少年が、目を開けるとそこには、フルフェイスのヘルメットを被り、バイクに跨っている、身体の凹凸から見て女性だろう人物がいた。

その前方には、緑の外殻にタイヤの痕を付けて、倒れているピューパ。

女性はヘルメットを脱ぐと、ブロンドの長い髪に鼻筋の通った、綺麗な顔立ちに、優しい笑みを浮かべて、少年の頭にそっと手を乗せると、こう言った。

「怖がらずに、よく頑張ったわね。大丈夫！ 後はお姉さんに、ちよつぴり、その勇気をわけて欲しいな」

女性は、手を空に向けて伸ばし、先ほどの蜂のよつな何かを呼び寄せる。

そして、叫んだ。

「HENSHEIN！」

腕に着けていたブレスレットに、その蜂を取り付けと、そこから、まるで繭のようなものに身体全体を包み込まれ、やがて、それも最初の方に包み込まれた箇所から順に晴れていく。

そこには、この場にいた誰もが救いを待ち望んでいた「仮面ライダー」が、立っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5019z/>

---

KAMEN RIDER SUN BEETLE

2011年12月17日18時48分発行